
テイルズオブジァビス～妖獣の守護騎士～

四季の夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブジァビス〜妖獣の守護騎士〜

【Nコード】

N1040Z

【作者名】

四季の夢

【あらすじ】

少年は大切な人達を守るために故郷を出た。帰って来た時に皆を守れると信じて。だが運命は少年から全てを奪いさった。そして時が経ち、成長した少年は傭兵となり復讐の為に生きていた。そんな時に一人の少女と出会った事により彼の運命は変わる事になる。

プロローグ（前書き）

作者は小説が初心者なので内容に違和感が在るかも知れませんが、
どうか暖かい目でよろしくお願いします

プロローグ

オールドドラント

フォニム
音素によって構成され、そして人々がスコア預言と呼ばれる物に執着して
いる世界。

預言はその者の未来を教えてくれる物。
それ故に

『預言が全て』

『預言こそが絶対』

と答える者も少なくない

そして、その言う考えによって預言により運命を狂わされた者もいる

ある者は

最愛なる人を失い

ある者は

望まぬ生を受け

ある者は

命を散らし

・・・そしてある者は

故郷と守るべき者達を失い自分から全てを奪った者に復讐を誓う。

そして物語は復讐の為に生きる一人の傭兵と、故郷と家族を失い魔

物に育てられた一人の少女との出会いによって始まる。

原作前：1（前書き）

話を作るのは大変ですけど諦めずにがんばります！

原作前：1

オールドラントのとある
場所で一人の男が立っ
ている。

その男は黒髪蒼眼で彼の右手には血の付いた刀があり周りには魔物の死体が転がっていた。

「これで全部だな」

俺の名前はレイン・アースライト
仕事は傭兵をしている。そして今はセントビナーからエンゲープ
まで商人を魔物から護衛している所だ。

レ「無事か？」

俺は隠れていた依頼人の無事を確認する

この辺の魔物で死ぬ事はないと思うが念の為だ。

すると隠れていた商人は出て来ると魔物の死体の数に驚いた様子だ。

商人「うお！凄いなあんたあんな短時間で魔物をこんなに倒しちま
うなんて。」

音素になって消えていく魔物を見ながら商人はレインに感心してい
た。

レ「ここら辺の魔物は数は多いが、そんなに強くなければ凶暴でも

ないからな」

それでも、一般人には十分脅威か・・・

レ「さあ、そろそろ行くぞ早くしないと日が暮れる」

――それにここら辺の魔物で注意するとしても、ここから少し離れた森にいるライガ位だからな。

俺はそんな事を考えながら依頼人を連れてエンゲープまで向かった。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 商人「いやあ今日は助かったよ。ほら報酬だ」

そう言つて報酬を渡される何とか依頼人と俺は日が暮れる前にエンゲープまで着く事が出来た。

商人「帰りも頼んでいいかい。」

その言葉に俺は首を横に振る。

レ「すまん、明日にはここを出て国境に行く予定なんだな。」

商人「国境？キムラスカの方にも行つて仕事をさがすのか？」

俺の言葉を聞くと少し驚いた顔をして聞き返す商人

まあ、確かに驚くのも無理はない、あの戦争が終つてもキムラスカとマルクト中は険悪だし、キムラスカ・マルクト両国共に治安もまだ悪いしな商人でもないのに国を行き来すると通行証があつても両国から疑いの目を向けられる。
傭兵なら尚更だ。

レ「まあ、そんな所だ。」

商人「そうか・・・残念だが仕方ないな。」

レ「済まないな。」

商人「いや、それなら仕方ないそれじゃ私はそろそろ行くよ。またな。」

そう言つて村の中へと商人は消えていく。

・・・さて、俺も明日は早いから宿と食料を確保して今日は早く休むか。

レ「キムラスカか・・・」

宿で部屋を取つた俺はベッドに横になりながら考え事をしていた。

レ「（俺から全てを奪つたあの男がいる国）」

故郷を友を家族を奪つた男そして俺の生きる目的

俺は当時、剣の修行の為に故郷であるホドを離れていた。
父上は俺が生まれる前に死んでしまった為、俺には母上しか居なかつた。

アースライトの名前も母上の方の名前だし、それに
アースライト家には代々

受け継がれている物があるそれは『譜術』で

その譜術は普通の譜術師【フォニマー】が使ってるのとは違い
特別な術らしい。母上は歴代の中でも過なりの譜術の使い手らしい
だから俺も母上から譜術を伝授された。

俺は全ての第七音素を初めとする全ての音素が使えるらしく。

母上はそれに驚いてもののその反面凄く喜んでくれた

それから、少し経って母上はガルディオス家の専属の譜術師兼家庭
教師になったそれから色んな事があつた親友が出来たり、親友の姉
さんに説教されたり。

それから俺は母上の知り合いの元で剣の修行するために故郷を出た。
帰って来た時には皆を守るぐらい強くなつてると信じていたんだ。

ホドが消滅したと聞かされるまでは・・・

そして俺は、ホドが消滅してから今まで俺はホドについて調べた。
そして人づてに聞いた。

その親友とその家族そして母上が死んだ事を。

そして・・・それを実行した男の存在を！

『ファブレ公爵』 奴とその家族を殺し俺と同じ悲しみを奴に思い知

らす為、俺は復讐に生きる決意をした。

「こんな復讐に生きる俺を見たら貴方方はなんて言うだろうな
なあ・・・ガイラルディアマリイベル様、そして母上」

俺のその眩きは誰も聞く事も無く消えた。

原作前：2（前書き）

アリエッタとヴァンとオリジナルイオンが出ます。

原作前：2

俺は日が昇る位に宿を出ると、そのまま村を出発する

レ「少し急ぐか。」

俺は少しペースを上げる

その理由は少し前に俺はある情報を掴んだからだ。

それはバチカルのアブレ邸で何かが起こったらしい俺はそれを好機と見た。

俺はその騒動に常時で奴とその家族を殺す。

最悪、俺は死ぬかも知れないが、このまま何もしないで死んだら。死んだ友と家族に合わせる顔がない！

俺は復讐の感情を何とか抑え王都バチカルを目指す

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 現在俺はセントビナーを

過ぎて橋を渡り終えた所だ

レ「流石に少し疲れたな日もすっかり上がって仕舞ったし少し休むか。」

そう言う俺は近くに生えてる木の周辺にホーリーボトルを撒いて、そのまま横になる

レ（風が気持ちいいな。）

そして俺は朝の疲れが出たのかそのまま寝てしまった

すぐ近くから桃色の髪を

した女の子が近づいてるのに気付かずに。

アリエッタ視点

ア「ここ・・・どこ?」

イオン様や皆もない

イオン様と皆でママに合って、そしてダアトに帰る途中に気付いたらイオン様もアリエッタの友達もいなくなってる。

段々と彼女の目から涙が滲み出てくる

ア「イオン様もママもない・・・ぐす」

そして涙を流しながらその辺りを探しながら、歩いていく。

ア（もう疲れた・・・です）

彼女がそんな事を思っていた時だった。

ふつと彼女の目に木で気持ち良さそうに寝ている男の姿が写る。
そして気付いたら彼女は男のすぐ隣まで来ていた。
そして男の顔を見て

ア「知らない人・・・でもきれいな顔・・・です」

男の顔立ちが気に入ったのかアリエッタはそう呟いていた。

ア（もう眠い・・・です）

すると彼女は男の隣で横になりそのまま男に抱き着く

ア（暖かい・・・それに凄く落ち着く・・・です。）

そしてそのまま彼女も眠ってしまう。

アリエッタ視点 E N D

それから少し経った後。

レ（ん？確か俺は・・・そうかあのまま眠って仕舞ったんだ。そろそろ起きないとまずいな）

そう思って起きようとした時、自分の隣に違和感を感じゆっくりと向いて見るとそこには・・・

見覚えのない桃色の髪をした女の子が、自分にしがみ付いたまま気持ち良さそうに寝ていた

レ「・・・なぜ？そしてだれ？」

寝る前には居なかった筈の者が居て混乱するレインを尻目に全く起きるそぶりが見えない少女。

レ「どうすればいいんだ」

急いで要るとはいえ魔物のいるこのあたりに何の武器もない少女を見捨てる訳にもいかず。

だからと言って、見ず知らずの少女の為にバチカルに行くのが遅くなり、ファブレ邸の警備が厳重になっていて復讐の成功率が下がるかも知れない。

レ「くそ〜どうするファブレ公爵を殺すのは今が好機かも知れないだが。」

頭を抱え散々悩んだ結果。

レ「はあ〜、仕方ない。ガイラルディア、マリイベル様、母上、敵討ちはもう少し先に為りそうです。」

流石にこんな少女を置いて行って死ににでもされたら夢見が悪い。

――今回は復讐に縁が無かったって事で・・・

次の機会を待とう。

レ「そうと決まれば今日はもう野宿の準備でもするか」

そう言うときレインは隣で

寝ている少女に自分の着ていたコートをかけると

野宿の準備に取り掛かる。

レ「さて、何を作ろうかな・・・」

エンゲープで買った野菜とブウウサギの肉を並べて見て。

レ「これだけ買って480ガルドとは流石はエンゲープだな」

なんて考えてる彼を二人の男と二匹の魔物が見ていた事に彼は気付いて居なかった。

イオン・ヴァン視点

イ「アリエッタを探して居たら、思わぬ物が見れたね・・・ヴァン」

小柄な少年の言葉に隣に居た男。

「ヴァンは少年の左右にいる大きな鳥の魔物と

大人のライガに目をやる。

ヴ「ええ。まさかアリエッタが初対面の人間にあんなに懐くとは」

そう言うとき魔物達に何か

合図を送り。

それを見た二匹の魔物は 野宿の準備をしているレインに向かって走って行く。

それを見たイオンは

イ「いいの？あの男死ぬんじゃない。」

と興味無そうに言うイオンに対しヴァン

ヴ「いえ、多分大丈夫でしょう。それに確かめたい事があるので」

そう言つて口元が笑う

イ「ふん、まあアリエッタを傷付けないなら僕はなんだっていいよ。ただ分かつてるよね？僕にはもう時間が無いんだよ。」

イオンはそう言つてヴァンに釘を刺す。

ヴ「ええ分かっていますよそれに私の記憶違いで無ければ、あの男はきつと我等の計画に役立つでしょう

あの男もまた預言によって運命を狂わされた者ですから」

イ「お前がそこまで言うなんてね。分かった好きにしなよ。」

そう言つとイオンはヴァンから少し離れた場所に移動する。

ヴ「ありがとうございます・・・（記憶が正しければあの黒髪に蒼
眼は奴に間違いないだろう、まさかこのような所で再会出来るとは
なレイン・・・）」

そう言うヴァンの顔は何処か優しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1040z/>

テイルズオブジァビス～妖獣の守護騎士～

2011年12月3日22時45分発行